

令和元年6月19日現在

機関番号：32689

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2016～2018

課題番号：16K16755

研究課題名(和文)古典的ハリウッド映画をめぐる哲学的・理論的言説についての体系的調査

研究課題名(英文)Basic Research in Philosophical and Theoretical Discourses on Classical Hollywood Cinema

研究代表者

木原 圭翔(Kihara, Keisho)

早稲田大学・坪内博士記念演劇博物館・その他(招聘研究員)

研究者番号：30755731

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,200,000円

研究成果の概要(和文)：本研究の目的は、「古典的ハリウッド映画(classical Hollywood cinema)」をめぐる理論的・哲学的言説を精査することで、現代の映像研究における「古典的ハリウッド映画」概念の意義を明らかにすることである。具体的な研究成果は以下の3点である。(1)映画批評誌や映画理論誌に掲載された「古典的ハリウッド映画」をめぐる言説の調査。(2)「古典的ハリウッド映画」をめぐる哲学的言説の分析。特に、哲学的映画研究の先駆者である哲学者スタンリー・カヴェルの映画論の特質とその歴史的意義の考察。(3)「古典的ハリウッド映画」に関する具体的な作品分析。

研究成果の学術的意義や社会的意義

「古典的ハリウッド映画」は、現在においてもなお映画研究における最重要概念の一つとして、いわば「規範」のようなかたちで機能しているが、その有効性や問題点は様々な観点から議論されている。本研究も昨今のそうした議論を踏まえつつその意義を再考したが、実際の古典的ハリウッド映画作品の分析を交えることで、単なる言説の調査ではなく、具体的な作品解釈に関わるより根本的な問題として提起できたことが、本研究の学術的な意義であったと考えている。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this study is to clarify the significance of the "classical Hollywood cinema" by examining theoretical and philosophical discourse on the concept. Specific research results are as follows. (1) Examination of discourse concerning "classical Hollywood cinema" published in theoretical film magazines such as Screen. (2) Analysis of philosophical discourse on "classical Hollywood cinema". In particular, the characteristics and historical significance of the film theory of the philosopher Stanley Cavell, who was a pioneer in the study of film philosophy. (3) Textual analysis of classical Hollywood films.

研究分野：映画研究

キーワード：古典的ハリウッド映画 映画理論 アルフレッド・ヒッチコック フランク・キャブラ ジョージ・キユーカー スタンリー・カヴェル

様式 C-19、F-19-1、Z-19、CK-19（共通）

1. 研究開始当初の背景

1910年代から1960年代にかけてアメリカのハリウッドで製作された映画は、一般的に「古典的ハリウッド映画（classical Hollywood cinema）」と呼ばれ、その作品様式は一種の「規範」として映画研究の領域において長らく重要な位置を占めてきた。しかしその一方で、2000年代以降になると、インターネット動画に代表される種々の新しいデジタル映像文化に対する人々の強い関心によって、映画は「映像研究」や「メディア研究」といった研究領域に包括され、その独自の存在意義を徐々に失いつつある。こうした潮流の中、「古典的ハリウッド映画」を再考することにはそれなりの理由と意義の説明が求められるだろう。この点に関して考察するうえで、70年代以降にハリウッドで製作される映画がしばしば「ポスト古典的ハリウッド映画」という名で総称されるという事実は重要である。CGIや3Dなど、現代におけるデジタル技術の目覚ましい発展による新しい映像技術の数々もまた、そうした名称で呼び得る映画を根本で支えながら映画研究に新たな視点を要求している。とはいえ、「ポスト」という接頭辞が示すように、現代においてもなお「古典的ハリウッド映画」は重要な参照項の一つであり、それとの偏差によって映像文化が理解されようとしている。しかし、当の古典的ハリウッド映画作品、あるいは「古典的ハリウッド映画」という概念そのものに対する考察が蔑ろにされるならば、現代の映像文化もまた十分に理解することはできないだろう。

2. 研究の目的

本研究の目的は、上述したような状況に鑑みつつ、「古典的ハリウッド映画」をめぐる理論的・哲学的言説を歴史的観点から精査することで、現代の映像研究における「古典的ハリウッド映画」概念の意義を明らかにすることである。さらに、単に言説分析をするだけでなく、個々の映像作品分析も並行して行いながら、「古典的ハリウッド映画」という概念そのものの妥当性を再考していく。

3. 研究の方法

以下の手順で本研究を進められた。まず初年度は、「古典的ハリウッド映画」という規範概念の生成に関する歴史研究を行うために、映画雑誌に現れる関連言説を体系的に調査した。また、アルフレッド・ヒッチコック監督の『サイコ』（*Psycho*, 1960）を「古典的ハリウッド映画」の臨界点の一つとして捉え、その歴史的意義について論じた。続いて次年度は、「古典的ハリウッド映画」を独自の視点から考察してきた哲学者スタンリー・カヴェル（Stanley Cavell）の映画論の読解を集中的に行った。最終年度は具体的な作品研究、とりわけ古典的ハリウッド映画を代表する監督であるジョージ・キューカー及びフランク・キャブラの作品を分析した。そして最後に、これまでの研究成果を統合し、現代の映像文化研究における「古典的ハリウッド映画」の意義の考察を現在まで継続して行なっている。

研究内容の観点からあらためて整理すると以下ようになる。①1960-80年代にかけて隆盛した「現代映画理論」の再考。特に、イギリスの映画批評誌『ムーヴィー』（*Movie*, 1962-）や映画理論誌『スクリーン』（*Screen*, 1969-）といった雑誌に掲載された「古典的ハリウッド映画」をめぐる言説の精査。②「古典的ハリウッド映画」をめぐる哲学的言説の分析。特に、哲学的映画研究の先駆者であるスタンリー・カヴェルの映画論の特質（メディアム、自動性、ジャンル論）とその歴史的意義の考察。③アルフレッド・ヒッチコック、フランク・キャブラ、ジョージ・キューカーといった、古典的ハリウッド映画を代表する監督の作品を中心とした映像テキスト分析。

4. 研究成果

本研究の中心課題は古典的ハリウッド映画をめぐる言説分析であるが、哲学者スタンリー・カヴェルが執筆した一連の古典的ハリウッド映画論の再検証においては、いくつかの重要な視点を抽出することができたと考えている。カヴェルは古典的ハリウッド映画もまた、自己のメディアウムに対して自らの視線を投げ返す自己反省的な「モダニズム芸術」として捉えることで、独自の映画論を展開してきた。こうした発想は、映画に内在する種々のイデオロギーを無批判に受け入れ、それを観客に伝達していたとする現代映画理論の古典的ハリウッド映画批判に真っ向から対立するという点で重要な思想である。具体的には、執筆者の博士論文（「スタンリー・カヴェルと古典的ハリウッド映画のモダニズム」）においては考察が不十分であった以下のような問題をより詳細に検討した。すなわち、カヴェルの映画論の鍵概念である「自動性（automatism）」概念の批判的再検討、そして古典的ハリウッド映画と精神分析の親近性に関するカヴェルの議論に対する考察である。本研究の成果として学術論文を準備中であるが、カヴェルの映画論を理解するうえで無視できない演劇論の代表作『悲劇の構造』の書評を執筆し、その思考方法（「メディアウムの創造」、「直観の育成」）の独自性の一端を明らかにすることができた。

また、古典的ハリウッド映画に関する言説分析の一環として、映画研究者デイヴィッド・ボードウェルが執筆した映画批評家（オーティス・ファーガソン、ジェイムズ・エイジー、マニー・ファーバー、パーカー・タイラー）論の書評を執筆し、アメリカ映画批評の歴史において、映画の「古典性」がどのように問題化されているのかを検証した。

本研究で考察した「古典的ハリウッド映画」に該当する映画作品に対しては、具体的な画面分析も合わせて行う必要がある。本研究では上述のスタンリー・カヴェルが自身の研究において重視した三人の映画監督（ジョージ・キューカー、アルフレッド・ヒッチコック、フランク・キャブラ）に着目し、彼らの作品が持つ「古典性」の諸相を集中的に分析した。キューカーの監督作品は大きく前期（1930-1940）、中期（1941-60）、後期（1961-1980）に分けることができるが、これらの区分は古典的ハリウッド映画の黄金期、変容期、衰退期と概ね重なる。本研究では、それぞれの時期で特に重要とされる諸作品（『椿姫』(Camille, 1937)、『アダム氏とマダム』(Adam's Rib, 1949)、『チャップマン報告』(The Chapman Report, 1962) 等) を順に分析し、古典的ハリウッド映画の物語叙述における鍵概念である「透明性 (transparency)」の美学の実態を分析した。現在、この成果を学術論文として執筆中である。

またヒッチコックとキャブラについては、古典的ハリウッド映画を考察するうえで極めて重要な二つの作品を詳細に考察し、それらの歴史的意義と作品解釈に対する新しい視点を提示することができた。一つは、古典的ハリウッド映画という枠の最後尾に位置すると同時に、その概念を解体する役割をも担うヒッチコックの傑作『サイコ』(Psycho, 1960) について、従来十分に議論されることのなかった、ヒッチコックのテレビ作品『ヒッチコック劇場』(The Alfred Hitchcock Presents, 1955-1962) との関連性という観点から再検討し、その複雑な関連をより厳密に定義し直した。もう一つは、1930年代の古典的ハリウッド映画を考察するうえにおいて、今なお重要な指標とされるキャブラの『或る夜の出来事』(It Happened One Night, 1934) を分析した。本作にはすでに膨大な数の先行研究があるが、本研究ではとりわけ主演俳優(クラーク・ゲーブル)をめぐる同時代の言説などを参照しつつ、登場人物たちが見せる特異な身体の活用に着目し、本作におけるその物語的機能の実態を分析した。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計3件）

- ① 木原圭翔 「『サイコ』における予期せぬ秘密——『ヒッチコック劇場』と映画監督」『映像学』日本映像学会、第97号、2017年、24-43頁。
- ② 木原圭翔 「書評：スタンリー・カヴェル『悲劇の構造——シェイクスピアと懐疑の哲学』中川雄一訳、春秋社、2016年」『図書新聞』株式会社図書新聞、2017年（第3293号）。
- ③ 木原圭翔 「書評：David Bordwell, *The Rhapsodes: How 1940s Critics Changed American Film Culture*」『映像学』日本映像学会、第100号、2018年、127-131頁。

〔学会発表〕（計1件）

- ① 木原圭翔 「『或る夜の出来事』における「身体=システム」の策略」2018年度第2回（通算第19回）映像テキスト分析研究会（日本映像学会）早稲田大学、2019年3月2日。

〔図書〕（計1件）

- ① 渡辺進也・フィルムアート社編『映画を撮った35の言葉たち』フィルムアート社、2014年（木原圭翔「15章 アルフレッド・ヒッチコック」55-58頁）。

6. 研究組織

（1）研究代表者

木原圭翔（KIHARA Keisho）

早稲田大学・坪内博士記念演劇博物館・（その他）招聘研究員

研究者番号：30755731